

令和元年6月11日現在

機関番号：37501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21696

研究課題名(和文) 要介護高齢者を対象とした「役割」が意識できるプログラムの開発と効果の検証

研究課題名(英文) Development and verification of effects of programs that can be notice of "role" for elderly people in need of care.

研究代表者

栗延 孟 (Kurino, Takeshi)

日本文理大学・経営経済学部・助教

研究者番号：50584512

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、要介護高齢者を「サポートを受ける存在」から、自身の役割をもつ「サポートを提供する存在」としてとらえ、高齢者福祉施設利用者を対象に、「お仕事ポイントプログラム」を開発し、その効果を検証した。プログラムは、利用者にポイントカードを配布し、やってくれたお仕事に応じてシールを貼るという、ごく簡単なものである。このプログラムを実施することで、利用者同士、利用者と職員、職員同士のコミュニケーションは大きく改善され、利用者のQOLの維持向上にも役立つ可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在の高齢者福祉施設では、生活支援として本人ができない基本的な日常生活に必要なことを介護者が直接介入することが中心となっている。しかし、衣食住が充実しており、身体の安全・安心が確保されれば、それで充実した生活になるのだろうか。本研究の結果は、要介護状態になっても高齢者が自ら進んで役割を取得し、それを果たすことを支援すること(できる環境をつくる)がQOLの向上に寄与することを示唆している。このような生活支援は、今後の介護福祉に強く求められることになると思う。

研究成果の概要(英文)：In this research, we reevaluate elderly people in need of care as "presence for receiving support" as "presence for providing support", and develop "work point program" for elderly people welfare institution users. The program is very simple to distribute point cards to users and put stickers on them according to their work. By implementing this program, the communication between users, users and staff, and staff could be greatly improved, and it might be suggested that it could help improve user's QOL.

研究分野：高齢者心理学

キーワード：役割 QOL 高齢者 要介護 福祉施設

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまで、高齢者の生活の質 (QOL) を高める要因として、社会参加は注目を集めており、「生きがい」、「社会参加」といったキーワードで多くの研究・実践が行われてきた。例えば、認知症予防教室、体操教室、カラオケ、散歩などといった地域の高齢者が参加できるサークル活動、ボランティアやシルバー人材センターを通じた地域貢献活動などが盛んに行われており、その効果として認知機能の改善や QOL の向上が確認されている。これらの「社会参加」は、カラオケや体操教室のように高齢者が自分の楽しみのために参加する活動と、ボランティアのように高齢者が他者や地域のために参加する活動とに大別される。例えば佐藤ら (2011, 日本保険福祉学会誌) は、高齢者の家庭内役割の有無と QOL の関連を検討しており、家庭内の役割は「生活活動力」と「精神的活力」と関連していることを実証しており、高齢者が自分ができる役割を果たし、「自分に役割がある」と感じることは重要であり、それが生きがいとなり、QOL を高める結果となると考えられる。

しかし、要介護高齢者を「サポートを受ける存在」としてとらえた実践・研究は数多く存在するが、要介護高齢者が自身の役割を果たす、「サポートを提供する存在」としてとらえる視点からの研究はみられない。申請者は介護職員という立場で高齢者福祉の現場に入り、介護職員を手伝うために、積極的に自分から洗濯ものをたたむ、掃除をするという高齢者の姿を多くみてきた。「自分が早く帰って、の仕事をしなければいけない」と訴える高齢者も多く、積極的に何かしらの仕事をしようという意識が感じられる場面も多くある。実践としては、ベネッセスタイルケアが運営するまどか川口芝が、ホームの中での「役割」を通じ、生きがいとハリのある「その方らしい生活」を目指す取り組みを行い、リビング・オブ・ザ・イヤーズ2016 で大賞を受賞しており、要介護高齢者の役割と QOL との関連については、注目されているといえよう。

2. 研究の目的

そこで、本研究は、研究 高齢者の社会的役割意識と QOL の関連を明らかにし、研究 高齢者福祉施設で「役割」を創設し意識させることプログラムを開発し、研究 このプログラムの実践を行い QOL に与える影響を検討した。

3. 研究の方法

研究 定年退職後の高齢者が多く登録している人材派遣会社に協力を依頼し、派遣会社を通して参加候補者に研究協力を依頼した。本研究は定年退職後に仕事を始めたきっかけについて焦点を当てたが、離職期間がある者の方が仕事を始めるより明確なきっかけがあると考えられたため、1年以上の離職期間がある者を対象にした。

インタビュー調査は、参加者が登録している派遣会社の面接室で行われ、はじめに研究の説明をした後に、参加者に書面で同意を得た後に行われた。インタビュー項目は、年齢、家族構成などの基本属性、定年前の仕事の内容、現在の仕事の内容と頻度、仕事を始めたきっかけ、仕事をする理由、仕事をやっていて楽しいこと・辛いこと、生きがいと感じていること、などであり、半構造化面接法を用いて進めた。

研究 研究 で明らかとなった、高齢者が仕事をやっていて楽しいこと・辛いこと・生きがいと感じることに配慮して、要介護高齢者が自身の「役割」を感じて参加できるプログラムを現場介護職員と協力して開発した。プログラム開発は、実践する施設の職員を中心として、「利用者の1/3以上は、できる・できるようになる・軽介助にてできるようになること」、「ほぼ毎日利用時間に行えること」、「皆に感謝され、やりがいを感じられること」に注意した。

研究 研究 で開発したプログラムをデイサービスで実践した。デイサービスに協力を依頼して承諾を得た後、カンファレンスで全職員に周知を行った。研究対象期間は1か月として、研究の協力を承諾を得られた利用者に対し、主観的健康観、WHO-5 精神的健康状態表、人生満足度尺度、主観的幸福感についてのアンケートをプログラム前後に依頼し、その変化を検討した。さらに、デイサービス相談員にプログラム経過の記録を依頼し、プログラム終了後にデイサービス職員を対象としてフォーカス・グループインタビューを実施した。

4. 研究成果

研究 定年退職者を対象としたインタビュー調査の参加者は 65~77 歳の男性 10 名 (平均 70.8 歳, SD = 3.89) であった。働く頻度については、1 名のみ週 5 日のフルタイムであり、他は週に 2~3 日の勤務であった。

仕事を始めたきっかけは、「家計のため」、「誘われたから」、「健康のため」という理由が報告された。また、仕事をする理由として「家計のため」、「趣味のためのお小遣い稼ぎ」、「仕事が好きだから」、「健康のため」などの理由が挙げられた。仕事を始めたきっかけ、仕事をする理由として「家計のため」と挙げた者は、いずれも病気のため蓄えが減ってしまい、そのために仕事を始めていた。これらの者は仕事をすることで、「健康」、「生活の張り合い」を感じていた。また、「誘われて」仕事を始めた者は、ゴルフなどの趣味のための「小遣い稼ぎ」、仕事があることにより「生活にリズムができる」、「お酒を飲まない日ができる」など、「健康」に結びつくという語りがあった。また、定年退職後に身体がなままっていることを自覚して、「健康のため」に仕事を始めた者は、仕事により「外出」して「健康」や「生活の張り合い」に

結びつくという語りがあった。これらの結果から、再就職の目的が経済的理由や仕事自体の充実度だけでなく、健康や生活の張り合いといった高齢者の生活を維持するための役割を担っている可能性が示唆された。高齢者は、仕事に経済的利益、健康上の利益も期待して仕事をはじめめる事例がみられるが、実際に仕事で感じる生きがいは「達成感」、「成長の認識」などであり、仕事従事の「きっかけ」と「生きがい」とでは異なる理由が報告された。

さらに、「生きがい」では、自分が行った仕事に対しての正のフィードバック（自己の成長の認識、自身が行ったことに対する満足感、自身が行ったことが視覚的にみることが出来る）や、他者と交流することと関連するものであった。定年退職後に高齢者が仕事に従事するには、「きっかけ」と「生きがい」の理由が異なるため、高齢者が継続して仕事を続けられるような「生きがい」として、経済的なものや健康上の利益などではなく、仕事に対する達成感や成長の認識、他者と交流できる、といった仕事の結果得られるものとして高齢者自身が実感しやすい利益が重要であると考えられた。

研究 研究 の結果を受けて、プログラムは以下の5点に留意して、研究 でプログラムを実施予定であったデイサービス職員と協力して開発した。利用者が正のフィードバックを感じやすいこと、他者との交流を促進すること、利用者の1/3以上は、できる・できるようになる・軽介助にてできるようになること、ほぼ毎日利用時間に行えること、皆に感謝され、やりがいを感じられること。

プログラムは「お仕事ポイント企画」と名付けられ、利用者が行った仕事に応じて、ポイントを与え、50ポイント達成でプレゼントがもらえる方式をとった。図1のようなポイントカードを作成し、仕事内容に応じて職員がポイントカードにシールを貼ることにした。また、このカードの説明として、「*このポイントカードは、あなたが今まで〇〇苑でしていただいたお仕事を記録するものです。」と記載した。シールがどれくらい貯まったか目に見える形でわかりやすくすることで、利用者が正のフィードバックを感じやすいようにした。

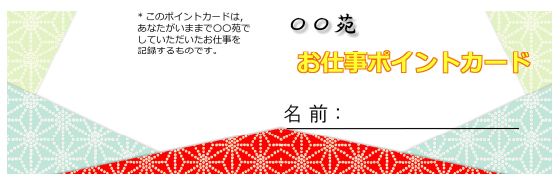


図1-1 ポイントカード表面



図1-2 ポイントカード裏面

ポイントがもらえる仕事内容として、タオル干し(3ポイント)、タオルたたみ(1ポイント)、エプロンたたみ(2ポイント)、広告用紙等によるごみ箱折り(5個につき2ポイント)、新聞紙四つ折り(10枚で2ポイント)、テーブル拭き(自分の前だけでもOK、1ポイント)おやつ後の下膳(1ポイント)、レクリエーションの協力(2ポイント)、ホワイトボードへの日付、明日の予定等の記入(1ポイント)、メモ用紙づくり(1ポイント)とした。

この項目を書いたPOPを作成し、利用者を使う各テーブルに配置した(図2)。また、このPOPの内側に、そのテーブルにつく利用者のポイントカードとシールを入れ、利用者が「お仕事」をしたときに、すぐに評価を形にできるよう工夫した。これにより、利用者はこのプログラムに興味を持ってもらい、フロアにいる間に注意を向けてもらう、すぐに評価を形にすることで意欲を高めるというねらいがある。

ホワイトボードへの記入は、直接ホワイトボードに記入することは難しいため、マグネットボードを用意し、利用者がテーブルで記入したものをホワイトボードに貼る形にした(図3)

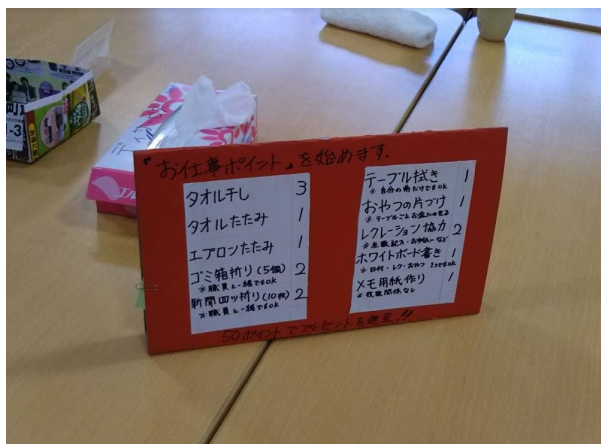


図2 お仕事ポイント POP

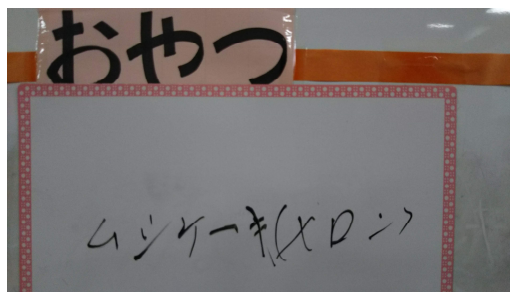


図3 マグネットボード

「おやつ後の下膳」については、利用者によっては湯のみ等を持って歩くことが困難である利用者もいるため、テーブル上にお盆を配置し、各自が手を伸ばしてお盆に置くことで1ポイントとするなど、できる環境づくりにも配慮を行った。

さらに、各お仕事は、職員と一緒にしてもOKとし、「レクリエーションの協力」といった仕事内容が限定されていないものも「お仕事」に含めて、参加意欲を引き出し、他利用者との交流も促せるよう工夫も行った。

プログラム初期は、職員が利用者に「すみません、Aさん、〇〇をやっていただけると助かるんですけど」などと声掛けをして、利用者に参加するように働きかける。もちろん、本プログラムは自発的な活動を対象としているため、強制はしない。実際にやってもらった活動に応じ、職員が利用者のポイントカードにシールを貼っていくが、その際、特に認知症の対象者に対しては、「いままでこんなに手伝ってくれたんですね。」等話しかけ、ポイントの意味の確認等を行い、必ず感謝の言葉を述べる。このポイントが50ポイント貯まると、施設側からプレゼントが送られる。

このようにしてほぼ手作りで介護職員を主体としてプログラムの開発を行い、施設の現状に合わせたプログラムを作成することができた。

研究 研究 で開発したプログラムをデイサービスで約1か月間実施した（日祝を除く23日間）。参加者20名の中、協力が得られた調査対象者は13名であり、男性2名、女性11名であった。年齢は70歳～97歳（平均88.0歳）、介護度は要支援1～要介護4（平均介護度1.93）であった。対象者の中には、週に2回利用するものから、毎日利用するものまでいた。

調査対象者の獲得ポイントは3～150ポイント（平均52.31ポイント、中央値42ポイント）であり、50ポイント以上獲得した者は5名であった。

デイサービス相談員による記録によれば、「企画を頂いた時点でのデイサービスは動きも会話も少なかった。なぜなら、職員数が少ないことを理由に全体的な見渡す見守りを中心としていた。・・・利用者同士も同席同士でも話すことは少なかった。」という状況であった。プログラムを開始して、各利用者のテーブルにPOPを設置すると、「目の前に置かれてあるPOPを手に取り読まれる」姿が観察された。また、「何気なくお盆にコップを置いてもらったときに『1ポイントやね。』』という発言が見られたり、「食後に『テーブルを拭こうか』』という発言も見られるようになり、徐々にこのプログラムがデイサービスに浸透していった経過が伺える。

また、利用者間で、「おやつの時『終わりましたか』と声掛け」をしたり、「〇〇さんと一緒にタオルをたたみましたよ。〇〇さんにポイントをあげて」と職員に他の利用者のお仕事について知らせる姿も見られた。また、他利用者に「きっちり折ってるね。すごいわ。」と褒めたり、利用者同士でゴミ箱づくりの方法を教える姿も見られた。そして、「レクリエーションの協力の仕事をするので（輪投げの輪を渡すなど）、（それまで他利用者とは交流のなかった利用者が）必然的に輪に入り全員と交流」する姿も見られ、利用者同士の交流が活発になっていった。

また、職員間では、「企画の流れが浸透するまで職員間で聞きながら進める」、「興味をもってもらえるよう参加しやすいように職員が利用者の間に入る」、「ポイントの貯まり具合や感動した姿などを伝え合うことで利用者の新たな一面を共有する」などの動きがあった。

デイサービス相談員の記録によれば、「気づけば、たった1か月で「職員と利用者」「利用者」と利用者」「職員と職員」すべての関りが密になっていた」とあり、相談員の目から見てデイサービスの雰囲気が大きく変わったことが伺えた。

プログラム終了後の職員を対象としたフォーカス・グループインタビューでは、プログラム期間中の様子としては、上記デイサービス相談員の記録と同じような意見が多く見られた。職員が特に嬉しかったこととして、プログラムが終了したにも関わらず、利用者が「タオルを干そうか」、「テーブルを拭こうか」と職員に積極的に声をかけてくれるようになったことがあげられた。プログラムを開始するまで、いつも「よだきい（大分の方言で「面倒だ」「疲れた」の意）」と言っている女性利用者が、このプログラムにはまり、多くのポイントを獲得して普通の生活が一変したとの意見もあった。

一方で、この「プログラムにはまらない人」も数名いたことが報告された。本プログラムに対して、特に嫌悪感を示すわけではないが、プログラムについて説明してもあまり理解できていない様子であったということである。実際に利用者が獲得したポイント数を見ても、1桁のポイントしか集められなかった利用者は2人いた。本プログラムにはまる人、はまらない人の特徴について議論がされ、「仕事をしていた人の方がはまったのかもしれない。」という意見があった。これについては、今後検討が必要だが、少なくとも「はまる」人は一定数存在しており、その方の活動を促進する上で、本プログラムは有効であったといえるであろう。

50ポイントを獲得した利用者には、施設長からの感謝状とプレゼントとして箱ティッシュ（50ポイントごとに1箱）を用意したが、「これだけ利用者によってもらっているのに、これだけだと申し訳ない気持ちもある。」「本当は、外食等に連れていきたいが、自発的にやらせようプログラムなので、そうすると他の利用者に不公平感が感じられてしまうのではないか。」という意見が挙がった。このポイントとそれに応じたノベルティについて、プログラムに積極的に参加しない利用者が不公平感を感じないような工夫が今後の課題である。

職員の心理的な変化として、最初は「職員がする仕事を利用者にしてもらってもよいのかという気持ち」も当初はあったが、「今まで自宅で当たり前のようにしていた無償の仕事を施設でもできる環境を整える」ことが重要であることに気がついたという意見があり、本研究の当初の目的であった、要介護高齢者を「サポートを受ける存在」から、自身の役割をもつ「サポートを提供する存在」として、利用者を再認識できた経過が伺えた。

利用者を対象としたアンケート調査では、主観的健康観、主観的幸福感、人生満足度尺度については、プログラムの前後で変化はみられなかった。WHO-5 精神的健康状態は、プログラム前と比較してプログラム後に高くなっており、有意差が認められた ($t(12) = -2.42, p < .05$; 図4)。ポイントの中央値を基準として、獲得ポイントの高群・低群とで比較してみたが、交互作用等は認められなかった。以上の結果は、本プログラムに積極的に参加した利用者だけではなく、あまりはまらなかった利用者においても精神的健康観が高くなったことを示している。デイサービス職員の意見等と合わせて考えてみると、本プログラムによって利用者全体が、他利用者や職員との交流が増えたことにより、QOL が高まった、もしくは利用者がデイサービスを活動の場として捉えられるようになった、職員の利用者への接し方が変化したなど、複数の要因が推察される。今後、本プログラムがどのような機序で、QOL の向上に寄与するのか、詳細に検討する必要があるであろう。

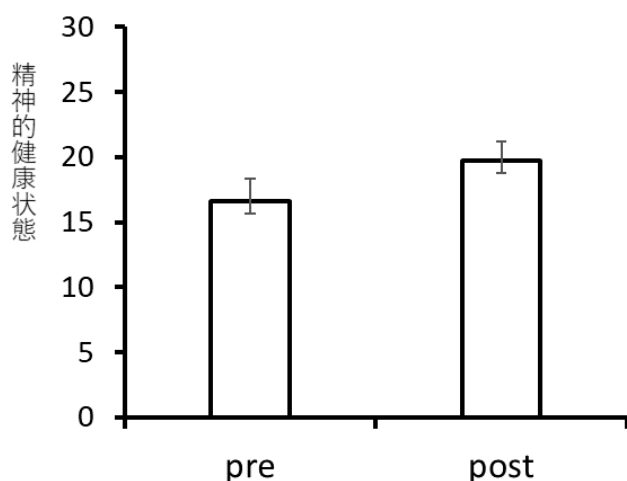


図4 .プログラム前後での精神的健康状態(WHO5 得点) の変化

5 . 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 1 件)

・栗延孟，涌井智子，石崎達郎（2017）. 定年退職者が仕事をはじめたきっかけと生きがいの関連 - 再就職した高齢者に対するインタビュー調査から - . 日本老年社会科学会 第 59 回大会 . 名古屋市 .

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。